

天声人語筆者に聞く



発行所
お茶の水女子大学
附属高等学校新聞部
文京区大塚 2-1-1
(5978) 5856

目次	
一面	天声人語筆者に聞く
二面	衆議院選挙を斬る！
三面	日中交流 新たな用務員 上村さん
四面	今成先生 祝結婚 植田先生 祝出産 本紹介・大雷 合唱コンクール 茶菓子

六三〇字のプロ意識

天声人語。言わずと知れた朝日新聞一面の名コラムである。一九〇四年の大阪朝日新聞に始まり、現在では学校の授業や入試でもよく使われ、『天声人語書き写しノート』なるものが出版されるほど名文として注目を集めている。

昨年二月二十八日、そんな朝日新聞「天声人語」の執筆者の方にお会いしてきた。

きっかけは、この学校新聞『お茶の水』の論説だった。昨年九月に配布した二八二号のオスプレイ配備問題についての論説の中のある表現が、一〇月二日の朝日新聞「天声人語」中の表現と似ていた、という点に端を発する。もちろん内容自体は天と地以上の差があり、また些細な類似ではあったのだが、小学生時からの天声人語ファンである記者が行動をおこすには十分だった。



論説委員室にて取材

さっそく、そのことについて感動した旨手紙を書き、その最後にもしよれば取材させてもらいたいとの図々しいお願いもつけて送った。するとすぐに論説委員補佐の菅野雄介さんから「メールでなら」と快いお返事をいただいた。そこで質問内容をメールで送る、なんと直接会って取材を受ける、といったこともできる、とのこと。後から伺ったところ、天声人語の名に隠してしまっているが、この学生からの取材申し込みは少なく、本紙の取材依頼に対し「大胆だな」と思い興味をもたれたようだ。

せっかくなので機会だが、残念ながら元々部員の少ない新聞部からは二人しか行くことができなかった。そこで二年生の中で取材に行きたい人を募ったところ、二学期期末試験直前の日程にもかかわらず二人の枠に二〇人以上の手が挙がった。改めて天声人語の人気の高さを思い知る。結局、二年生組の藤瑞帆さん、二年生組の井上彩さん、二人が取材に同行することになった。

かくして平成二十四年一月二十八日、四人のお茶高生が築地の朝日新聞東京本社に向った。同行することになった。質問にはふたりの天声人語執筆者の朝日新聞論説委員の富永格（ただし）さんと菅野さん（たけし）さんが答えてくださった。もう一人の執筆者は福島申（しんじ）さん。

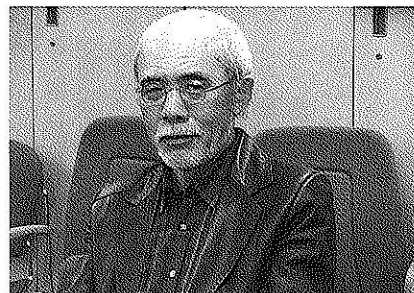
書く手順

天声人語は全部で六三〇字の六段落で構成されている。

まず最初に決めるのはいかなるテーマか。天声人語は新聞のコラムにしてはわりと論理的なものだからである。例えば政治について、とすると、次に切り口を決める。政治的な動きがあったとして、それを批判するのか、盛り立てるのかをバランスを見て決定する。そこまできたら書き始める。六段落の中で、一番大事なのは最初の段落だ。導入部は読み手に心を惹きつけるにはいけなくてはいけない。最初が面白くないと記事は読まれない。例えば地理の雑学から入って政治の話へ、というように繋げる。最後に賛成か反対かなど立場を明らかにする。最後の終わり方も大事で、後味を良く、「明日も読もう」という気になるように書く。これが毎日やっていることだ。

コラムの雑学・名言

天声人語はよく広範囲の雑学や名言の引用を効果的に用いて展開されている。それらの知識について尋ねた。雑学や知識は頭に入っているものもあるが、実は菅野さんに「こんな例を探してねえ」と頼んでも見つからず、よくあるそうだ。時間が無いので毎日慌ただしくやっているらしい。



天声人語 執筆者 富永格さん



良い記事を書くにはどうしたらよいかを伺うと、「天声人語を書くときに、速さはそこまで求められないけど、断った上で、まず取材力を挙げた。様々なことをよく見て吸収し、それを効率的に再構成する。」

インタビューは録音するよりメモに取った方が後で速い。書き出しは「いつ、どこで、誰が、何を」というように「いつ」のことから。大事な情報から書いていく。腕を上げるには、経験と練習あるのみ。「材料さえ揃えば、なんとでも書ける。文章の滑らかさなどの修正は先輩記者に任せ、まずは現場に」と話した。

天声人語を書くときはそれを頭に入れて、一般の記事も社説の方角を踏まえて書くが、必ずしも全体が統一されているわけではないらしい。社説として大きな方向性は出され、意見は記者一人一人違ふもの、という考え方をしている。

だから富永さんは一度も「あれを書け」と指示されたことはないと言っている。その好きに書かせてくれる自由がこの会社の良いところであると語った。

紙面作りの極意

インタビューで相手の本音を聞くには、徹底した調べが欠かせない。富永さんが歌手の和田アキ子さんを取材したときには、生年月日や血液型はもちろん、持ち歌や最新の曲を調べ、口ずさめるようにしていったという。どんな話題にも対応するための。

そして、相手の顔を直視して質問する。適度に視線を外すことは必要だが、重要なことを聞くときにはずっと目を見る。事件のあった現場で取材するときは、答えてくれる人を探して声をかける。立ち止まってもらうのはなく、一緒に歩きながら質問するのが基本だ。

人によって聞き方も変える。「答えたくない」といっても答えてもらわなくてはならない。いろいろな人に会って、嫌な思いもたくさんして、一人前になっていく。どんなときにも誠心誠意の姿勢で質問することが重要だ。

論調
一田一回午前二〇時半くらいから一五から二〇人くらいの論説委員が集まって、社説を決めている。

にその点を指摘される。ツイッターやネットの掲示板は菅野さんがチェックするそうだが、それでも「だからマスコミは」と叩かれる。

それでも、富永さんは語る。「粗探しは、読まれている証拠。参っちゃうこともあるけど、たくさんの人に読んでもらえると思う」と記者員利に尽きる。一つの意見が届くことは、あと二〇〇人は同じことを思ったということ。耳に痛いけど貴重な反省材料だよ。「記者になっても三四年経った今も、自分の書いた記事が世に出るときにはさくさくするそう。」

女性の職場環境

朝日新聞社では昔に比べて女性記者が増え、今ではたくさんいるそう。産育休暇も前より周知されるようになり、利用は多い。母親としての難点は、記者としての仕事そのものが勤務時間の不規則さだ。事件はいつで起きるかわからない。もし自分の担当する地域で何かが起これば、夜中も飛び起きて現場に駆けつけなければならない。取材が危険なことだってある。どの職種でもそうだが、母になるには覚悟がいるようだ。

他部署との関わり

天声人語は既に世に出た記事について書くことが多い。新聞を見ながらテーマを決める。その記事を書いた人には、新聞に載せる前に必ず



ず内容を確認してもらっているぞうだ。

天声人語以外で
特に読んで欲しいところ

それは全部だが、特に社説。朝日新聞が今世の中で起きていることをどう考えているか、ということが分かる。それぞれの面の最初にきている記事、大きな見出しの記事も読んでほしいところ。あとは自分の興味のあるテーマについて読むといい、このアドバイスをいただいた。

取材を終えて

今回ふとしたことから、各コラムとして名高い「天声人語」の筆者の草水さんに直接お話を伺うことができたのは、信じられないほどの幸運だった。帰り際になっても、なにか聞き残しがあるのではと、去り難かった。記者の心算を細かに教えていただき、すばらしい勉強になったが、その中で一つ、痛みを伴った教訓がある。

それは、根拠の薄い批判はただの愚言だということだ。

事前に取材班の打ち合わせで、「最近、天声人語は質が落ちた」という意見が話題に上った。かなり分を越えた問いだが、若さに任せ、それに対する考えを聞いてみた。

すると、「それはいつと比べてだろう。昔の大先輩との比較だったら仕方ないと言うほかないが、一日単位だったら、その日ごとのクセがあるもので、一概には比べられないのではなか。もし私が書きはじめてから徐々に、このことであれば、慣れ書き流しているというところになるの



本『天声人語 2012 秋』にサインをもらう 4 人
お茶高生へのサインが入ったものが、図書室に配架してあります

で興奮が収まりませんでした！

まず、執筆者の草水さんにとっても印象的。朝日新聞で最も文章力があるという名文記者だけに、その話し方、チョイスする言葉、手の動き、ブレない視線、何から何まで堂々としていて、これが何千万もの読者を抱える人物なんだな、と心から思いました。

取材に同行して

◆二年梅組 井上彩さん

昨年の現代社会の授業で新聞を読むことの大切さと楽しさを知ってから、継続して朝日新聞を毎日読むようになった。

いつも始めに読む天声人語は、心がホッとしたり、知らなかった歴史の一面に感動してひとつ賢くなった気がしたり、政治への風刺めいた表現や比喩の巧妙さに惚れ惚れしたり、毎回違った読後感を得られます。どうしたら、どうやってこんな文章を書くのか疑問に思う人も多くいます。そんな天声人語の執筆の方への取材に同行できるとは、本当に貴重な時間を過ごすことができて、新聞部に感謝すると同時に、最後の最後まで

◆二年蘭組 藤瑞帆さん

「天声人語」に取材できるという貴重な機会をもう二度とないと思う、同行させてもらって。毎日読んでいた天声人語の筆者がどんな人か知りたかったし、新聞を作っている現場も見てみたかったからだ。

二人の「天声人語」のうちの草水さんと執筆の手助けをしていただいていた「堅い」イメージとは異なり、草水さんは気さくな方だった。だが、その眼光の鋭さから、三〇年余りの記者の経験が感じられた。取材中も私たちの質問に丁寧かつ的確に答えてくださり、こんなすごい人が天声人語を書くのかと圧倒されるばかりだった。実際、私は緊張のあまりほとんど聞き役にまわり、質問は他の三人任せになってしまった。

取材で最も印象に残ったことは、「いい質問をするには、充分な準備をすること」という草水さんの言葉だ。私は今回の取材をするにあたって、朝日新聞を熟読し、自分なりに質問を練ったつもりだった。しかし、実際に取材してみると、完全に準備不足だったことを痛感した。その結果、大変失礼な質問をしてしまい、反省しきりだった。本格的な取材は今回が初めてだったのだが、周到な準備をすることの大切さを実感した。

帰り際には社内の様子を少し見せてくださった。思っていたよりも慌ただしさはなかった。机の上には所狭しと資料が積み重ねられていた。取材に出ている方も多く、インタビューが充実していたり、日々新聞が作られている現場感が伝わってきた。

今回取材して、短い時間ではあったものの、本当に充実したよい経験ができた。振り返ってみれば反省材料ばかりだが、その分得たものも多い。今後より一層社会に目を向け、広い視野を培っていかうと強く思った。最後に草水さん、菅野さんに改めてお礼を申し上げた。

◆二年蘭組 藤瑞帆さん

「天声人語」に取材できるという貴重な機会をもう二度とないと思う、同行させてもらって。毎日読んでいた天声人語の筆者がどんな人か知りたかったし、新聞を作っている現場も見てみたかったからだ。

二人の「天声人語」のうちの草水さんと執筆の手助けをしていただいていた「堅い」イメージとは異なり、草水さんは気さくな方だった。だが、その眼光の鋭さから、三〇年余りの記者の経験が感じられた。取材中も私たちの質問に丁寧かつ的確に答えてくださり、こんなすごい人が天声人語を書くのかと圧倒されるばかりだった。実際、私は緊張のあまりほとんど聞き役にまわり、質問は他の三人任せになってしまった。

取材で最も印象に残ったことは、「いい質問をするには、充分な準備をすること」という草水さんの言葉だ。私は今回の取材をするにあたって、朝日新聞を熟読し、自分なりに質問を練ったつもりだった。しかし、実際に取材してみると、完全に準備不足だったことを痛感した。その結果、大変失礼な質問をしてしまい、反省しきりだった。本格的な取材は今回が初めてだったのだが、周到な準備をすることの大切さを実感した。

帰り際には社内の様子を少し見せてくださった。思っていたよりも慌ただしさはなかった。机の上には所狭しと資料が積み重ねられていた。取材に出ている方も多く、インタビューが充実していたり、日々新聞が作られている現場感が伝わってきた。

今回取材して、短い時間ではあったものの、本当に充実したよい経験ができた。振り返ってみれば反省材料ばかりだが、その分得たものも多い。今後より一層社会に目を向け、広い視野を培っていかうと強く思った。最後に草水さん、菅野さんに改めてお礼を申し上げた。

◆二年蘭組 藤瑞帆さん

「天声人語」に取材できるという貴重な機会をもう二度とないと思う、同行させてもらって。毎日読んでいた天声人語の筆者がどんな人か知りたかったし、新聞を作っている現場も見てみたかったからだ。

衆議院選挙を 斬る!!

昨年二月二十六日、野田佳彦内閣が総辞職し、第四十六回衆議院選挙が行われた。結果は自民党の圧勝。安倍政権が発足した。政権交代の他にも、多党乱立や投票率の低下など様々な面で特徴的だった今回の選挙。お茶高生はどう受け止めたのだろうか。三年生も含め政治アンケートを行い、半数程度から回答を得た。

衆議院選挙の結果についてどう思うか。

自民党の大勝について「勝つとは思っていたが、民主党とこんなに差がつくなんて予想外」という感想が多く見られた。その勝因としては「民主党が嫌だったから消去法で選んだのでは」「小さな党ができてきて票がはばかれた」「みんな世論に流され過ぎ」とネガティブな分析をしている人が多い。その結果についての受け止め方は人それぞれ。「本当に良かった」「まあ妥当」「また自民か」「ありえない」などあるが、否定的に受け止めた人の方が多かった。肯定的に感じている人は、民主党の政治、特に外交面に失望したという理由を挙げた。一方否定的に感じている人が特に注目しているのは改選についてである。「国防軍」という言葉に反発を感じ、日本が右寄り（保守派、全体主義）の国になってしまっているのではと危惧する人は、現代社会の授業で今回の選挙について話し合ったという三年生に特に多い。また、以前一度辞任している安倍晋三首相に対する不信感もあるようだ。

他に「みんな選挙に行くべき」と投票率の低下を問題視する声は非常に多くあった。

もし有権者だったらどの党に投票したか。また、その理由は。

下の表を見て欲しい。既出の結果に反し、お茶高選挙で政権をとったのは民主党だった。続いて自民党、維新の会と票が入った。

民主党に票を入れた人の中には、野田佳彦首相に好感をもち、支持する人が多かった。また「チャンスを与えたい」「もっと長くやらないと結果が出ない」など民主党政権の期間が短すぎるなどの意見も多く出た。「他に政治を任せられそうない政党も無いので現状維持」との消極的な声もあった。

自民党は、今まで長く政権をもってきたノウハウ、安定感に期待する声が目立った。今までの民主党の政治に反発する人も自民党に票を入れたようだ。

維新の会へは、強いリーダーシップで日本を変えてくれそうという期待から、自民党政権、民主党政権どちらも経験しての消去法で票を入れた人もいた。

そして多かったのが「棄権」である。理由として「支持しない政策がない」「政策が多すぎてよく分からぬ」「などが挙げられた。

新内閣に期待することは何か。

やはり安倍政権が強く打ち出している「景気回復」が多く挙げられた。また「未来を見据えた政治」「二年は続いて」「最近の短命政権を批判する姿勢も伺える。他には「領土問題の解決」「復興」など意見が分かれた。一方「何も期待しない」という手厳しい声も少なからずある。

これからの日本はどうなると思うか。

「たけなな」「破滅」など悲観的な見方がほとんど。「大きくは変わらない」「停滞する」と書いた人も多い。「また首相が変わる」という予想も。ひと言「景気回復」だけが前向きな回答だった。

このように、お茶高では実際の衆議院選挙とはまったく異なる結果となった。これは有権者と高校生で「景気」の重要性に差があることとから生まれたものだと思う。経済を成長させようとする政策「アベノミクス」という言葉も作られるほど経済重視の姿勢を打ち出している安倍政権。しかし高校生に

政党	票数
民主	54
自民	43
維新	15
未来	6
社民	5
共産	3
公明	2
みんな	2
国民新	1
棄権	24

お茶高生が投票したら (票)